
マシニティ・コア

おっさん 4 1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マシニテイ・コア

【Nコード】

N0991L

【作者名】

おっさん41

【あらすじ】

人々を恐怖させている機械の獣、マシニテイ機械獣。

機械獣を捕獲するもの、キャプチャー捕獲者。

これは、キャプチャーを目指す少年、トリクの物語。

設定（前書き）

友人が昔書いた黒歴史漫画を待望のノベライズ化！

…待望？

追記・5月9日 武器の説明とかを削りました。登場するのが遅いので。

追記・5月24日 新キャラクターの人物紹介を入れました。

設定

世界

マシニテイ

機械獣の増殖によって人間の生活が脅かされている世界。腕に覚えのある捕獲者たちの集団、協会が各地に点在し、捕獲者たちが機械獣を捕獲することで機械獣の脅威を退けている。6つの地方、ティスマニア、デルギウス、セルデリア、クリエスタ、タミール、フェリアブル、インスグルに分かれており、史実によると機械獣出現以前は地方同士での戦争もあつたらしい。今では機械獣撲滅のために協力し合っている。

トリク 男 14歳 ティスマニア出身

熱血漢であり、向こう見ずではあるが冷静になるべきところは冷静。キャプチャーになることが目的。スピードはともかく力だけならトップクラス。実はもう一つの目的があるように…。

フィーブル 男 16歳 デルギウス出身 ギルド・明日の夜明け所属
デイ・ブレイク

ものすごく冷めてる。戦闘においては頭脳戦を得意とするが、身体能力もすべてが高い。いつもつまらなさそうな顔をして遠くを見つめている。腕に紐のようなものをいつも巻きつけているが何なのかは不明。

カミュ 女 14歳 タミール出身 ギルド・明日の夜明け所属
フィーブルに憧れて、彼のような強いキャプチャーになりたいと思っている。結構わがまま。戦闘においては素早く動き、敵をかく乱する。

ゴルドー 男 46歳 タミール出身 ギルド・明日の夜明けギル

ド長

ものすごくマッチョな『明日の夜明け』のギルド長。外見から、キャプチャーと思われるがちだが10年前に左足を負傷し、引退している。豪快な性格で、リーダーシップを発揮している。ギルドの間からの信頼は厚い。

シェーン 女 ?歳 タミール出身 ギルド・明日の夜明け所属
多少の若さを残しながらも、年季の入ったその見た目はどう見てもおばさん。しかし、おばさんと言われると、それが心の中でも読み取って怒る。若干エスパー気味。本職は、マシニティの研究者。研究者の中でもかなり優秀らしい。

マシニティ 機械獣

さまざまな獣の形をした機械。体の一部に炉を一つずつ持ち、それを破壊すると破片ごとに再生、増殖する。そのため捕獲者は機械獣を炉を破壊せずに捕獲し、それぞれの協会に持ち帰って協会のスクラップバ解体者が炉だけを取り除いて解体する。炉を取り除いておかないと数時間でどんな破損状態でも直ってしまう。生殖機能は持たないようだが炉の破壊が増殖に繋がると判明し、破壊しなくなった今でもなぜか数が増えているようだ。オーバーテクノロジーであり、解体はできてもその技術自体は全く解明されていない。

設定（後書き）

とりあえず設定をば。

あとあと変えるかもしれないし、加筆するかもしれません。

(1)

くそっ！しつけえぞ！

暗い森の中を俺、トリクは走っている。

バウ！バウ！、背後で犬のほえる声が聞こえる。…実際には犬じゃないんだが。

後ろを振り返るとそいつらの姿が見える。犬の形をした機械。^マ機械だ。^{シニディ}

「いい加減にしやがれ！」

ポケットの中にあつた煙球を投げつける。追われ始めてから数十分。こうして視界を奪ってどうにか逃げてきた…のだが。

煙の中から犬の機械獣が現れる。

くそっ、完全においを覚えられた！視覚ではなく、嗅覚で追ってきやがる。

俺の脚は一般人に比べればはるかに速いが、それでも機械獣相手に逃げ切れるほどではない。最寄の町まで約一時間。確実に追いつかれる。

…こうなったら、やるしかないか。

これ以上は体力の無駄遣いにしかならない、そう判断して俺は機

械獣のほうに振り向いた。

突然振り返った俺に驚いているのか、とにかく機械獣が止まり、まっすぐこちらを見ている。

急にあたりが静まり返る。

聞こえるのは俺の荒い呼吸と、風が通り抜ける音だけだ。

やるなら…先手必勝！

静寂を切り裂いて俺は機械獣に殴りかかる。機械獣よりも機先を制した。

考え付く限りでは最善の選択。しかし…

ブォン！

拳がむなしく空を切る。機械獣は俺の拳撃を横にかわしていた。

ほんの少しのサイドステップ、そこから俺に食いつく、その鋭い牙で。

思考がスローモーションで流れる。

機械獣が、その牙を光らせてこちらに飛び掛ってくる。表情などないのに、なぜか勝利の笑みを浮かべているように見えた。

だめだ！やられる！

俺は死を覚悟した。

ジャキツ！

何かが刺さった音が響く。

機械獣の牙が俺に刺さった、という訳ではない。

機械獣の腹部に槍のようなものが刺さっていた！槍は地面にも突き刺さっているので機械獣は動くことが出来ずにもがいている。

もがいている間にも槍が降り注ぎ、四肢も首もその槍で切り落とされていく。

こんな芸当が出来るのは…

キャプチャー
「捕獲者！」

槍の飛んできた方向を見上げると、木の枝の上に人が立っていた。

その人物は無表情に空を眺めていた。ただつまらなそうに。

「おい！あんた！」

俺は命の恩人たるその人にしゃべりかけた。しかし反応がない。

気にするな、とにかく目的を果たすんだ。

「いきなりで悪い、だけど聞いてくれ！俺を…」

ここで一回言葉を区切る。とにかく大きい声で伝えよう。

息を大きく吸い込んで…

「俺を、あんたの弟子にしてくれ!」

(1) (後書き)

この話は友人黒歴史をちよつと書き変えただけです。
読みにくいところなどあつたら言ってください。

(2)

「断る」

俺を助けた男は静かにそう言った。

「な…なんで!？」

「理解できないのか？なら教えてやる、まず礼儀がなってない。こ
ういふときは礼を言うもんだ」

「うっ」

忘れていた。俺はこいつに助けてもらったんだった。

「そしてそれ以上に…」

「それ以上に…？」

「お前、弱い。はっきり言ってキャプチャーには向いてない」

「やつ…やつてもみないうちにそんなりはっきりいうんじゃねえよ
！」

確かにさっきの戦いだけ見ればまだまだ未熟者だったかもしれないが、鍛錬すれば俺だってキャプチャーにつ…。稽古をつけてもら
いたくてわざわざ隣の国から歩いてきたのだ。そうやすやすと引き
下がれはしない。

「そこそこは鍛えてるんだろう。素人の動きじゃなかった。だな、問題はそんなところじゃない。お前…手、抜いてた。明らかに本気じゃなかった。そんな覚悟のやつはキャプチャーには向いてない。悪いが、あきらめてくれ」

…そう、俺は逃げることで以外には本気を出していなかった。しかし、あれは…。とにかく誤解だ。少なくとも俺はあの場での最善の手を打ったつもりだった。

「いやっ…あれは、」

「フイーブル師匠！」

弁解を始めようとした俺の言葉を凜とした、女の子の声がさえぎった。

声のする方を向くと、樹の上に軽装の女の子が立っていた。

「今日は私のこと試してくれるっていったじゃないですか！ギルドの方にいないから探しましたよ」

「そんなこと言ってたか？」

詰問するその女の子にフイーブルと呼ばれたその男は相変わらず無表情に受け流す。

「言っていましたよ！今日という今日は逃がしませんからね！」

「めんどくせえなあ…」

「おい、俺の話がまだ終わってないぞ！」

長く放っておかれてしまったため声が荒がる。

「……！？あんた誰よ？」

少女の方が睨みつけてくる。

「俺はトリクだ。お前こそ誰だよ？」

俺も負けじと睨み返す。

「私はカミュ。このフィールさんの弟子よ！」

もう弟子がいたのか。それなら俺を弟子にしてもらうのはむずかしいか……

「弟子にした覚えはないんだが……」

「弟子じゃねえじゃねえか！」

「うるさい！今日から弟子にしてもらうの！」

「いや、俺が弟子になるんだ！」

がみがみ言いあう俺とカミュ。たがいにヒートアップしてしまつて止まらない。

「少し黙れ」

フィーブルの一声で両方が黙った。

「…そこまで言うなら分かった。二人ともついてこい。試してやるよ」

フィーブルが背を向ける。向いてるのは近くの街、しかしただの街じゃない。この世界の6つの地方にある協会、タミール地方のギルドである明日の夜明けがあるのだ。ギルド
ディフレイク

「ついてこないのか？」

背を向けたままこちらに問いかけてくる。

聞かれるまでもない。やってやる！

「ようやく試してくれるんですね！」

カミュがうれしそうな弾んだ声で返事をした。

「俺もやるさ！俺はキャプチャーになるんだ！」

「ふっ…返事だけは一人前だな」

少し微笑してすぐに走り出す。

俺と、カミュはそのあとを追った。

キャプチャーになるんだ！絶対に！

(2) (後書き)

第二話です。出来は微妙かも。

この回の途中、フェーブルがトリクの申し出を断ったところまでが友人黒歴史でそのあとの展開はオリジナルです。

次回はトリクとカミュがファールブルの出す試験を受けます。

(3)

ギルド明日の夜明け(デイブレイク)。

六つの地方に一つずつ有るキャプチャーたちの集う場所。このデ
イブレイクはタミール地方を管轄しているギルドである。

例外を除いてギルドに認定してもらわなければキャプチャーには
なれない。だからこそ俺はここに来たんだ。キャプチャーになるた
めに。

目の前にはギルドの建物だ。多少古ぼけてはいるものの、それす
らもこの建物の剛健なさまを引き立てているかのように見える。と
にかく、でかい。

「お前たちを試す前にまず確認しておきたいことがある。マシニテ
イのことをお前たちはどこまで知っている？」

フィーブルがこちらに問いかけてくる。

「本に書いてあることなら全部暗記してます！」

カミュが自慢げに答えたあとこちらを見た。

目が問いかけてくる、あんたはどうなのよ、と。

「……マシニティは、一言で言えば炉^{コア}だ。やつらの体内にあるコア、
それがいづらの生命でもあり、逆にコアさえ取り除いてしまえば
ただの鉄くず。ただ、そのコアが厄介だ。ただ破壊しただけでは復

活してしまう。それも破片ごとに、だ。だからキャプチャーはコアを破壊せずに捕らえる必要がある。こんなもんか？」

「そうだな、ほかにも大きさ、体の金属の違いで名前がついてたりするが別に知らなくてもいい。今からお前たちにやってもらっ試験には関係がないからな」

フィーブルがいりぐちに手をかけその扉をあける。

「そういえば、試験って何をやるんですか？」

聞きたかったことをカミュが代わりに言ってくれた。

「行けば分かるさ」

そうして連れてこられたのは大きな地下室。

無機質なコンクリートで囲まれた広い部屋だ。

その部屋の中央辺りまで進むと突然俺たちが入ってきた扉が閉まった！

「さあ、始めるぞ！」

フィーブルの合図とともに入ってきた扉とは違う扉が開く。

「な…なにアレ…」

カミュが驚きをあらわにする。

無理もない。俺だって驚いている。

ただし、俺の驚きとカミュの驚きは意味合いが違っていた。

なんでアレがここにあるんだ…。

目の前には、漆黒の体。形容しがたい、この地上のどんな生物とも似ていない獣の姿。

「これが試験内容だ。…そいつを、止めてみる」

その声に呼応するように、その獣は猛った。

(3) (後書き)

試験やるっていったけどやれませんでした。申し訳ない。
相変わらずうまく書けていない気がします。これも練習だと思って
次回からがんばります。

(4)

「試験って…これがですか!？」

混乱した様子のカミュ。正体不明のマシニティから繰り出される斬撃をかわしながらなので冷静になりきれていないのだろう。

一方、俺の頭はさめていた。とりあえず状況を確認める。

(敵の数は一体、大型、5メートルくらいか？大きさのわりに素早い。…全部一緒だ)

そう、このマシニティの恐ろしいところは大きくせに速さも兼ね備えていることだ。下手したらこの巨体で、小型のマシニティ以上の素早さを持っているいるかもしれない。

(だめだ、俺の拳じゃ届かないっ！)

思わず齒軋りしてしまう。悔しい。自分の遅さが。昔と何も変わっちゃいないっ！

本当に悔しい。自分“一人”ではどうしようもないってことが！

「おい！その女！」

「女って呼ぶな！私にはカミュって名前があるの！」

攻撃をかわしながら即座につっこんできた。その声にはだんだんと余裕が戻ってきているように思えた。きつとかわすこと自体はこ

いつにとって簡単なんだろう。

予想通りこいつは速そうだ。俺なんてかわしながら考えるだけで手一杯だったのに。

「カミュ！こいつを足止めできるか？」

「っ…。足止めぐらいなら出来るわ！でも足止めだけで精一杯、あんた一人でどうする気！？こいつ、すごく硬いわよ！」

懸念ももつともだろう。確かに今までの攻防を見て俺がこのデカブツをどうにかできると思うやつはいないだろうから。

「どつちにしろ、このままじゃジリ貧だ。…だまされたと思って、俺にかけてくれ！」

しかし、信じてもらうしかない。この戦いに勝つためには。

「…分かったわよ、倒せなかったら、承知しないからね！」

しばらくの逡巡の末に覚悟を決めてくれたようだ。

そしてカミュが急に加速し始めた。

は、速ええ！予想以上だ。俺の三倍は速いんじゃないだろうか。目で追うことすら難しい速度まで加速していく。

マシニティもこの速度にはついていけない。先ほどから繰り返し返していたつめによる攻撃もせず、右往左往するばかりだ。カミュの動きを捉えることに躍起になっていて足がお留守だ。

今なら当てれる！

拳を握って駆ける！マシニティがこちらに気づいてつめで切り裂いてくるが、遅い！その上、足は止まったままだ。

横殴りの斬撃をかがんでかわし、そのまま反動を付けて跳ぶ！

狙うはがら空きの顎だ！全身を使って、こぶしを振りかぶる。

「吹き飛ばえええー！！！！」

掛け声とともにこぶしを振りぬく。痛烈なアッパーカット！

金属の乾いた音が部屋中に響き渡るとともにマシニティが上空へと飛んでいく。そのままの勢いで20メートルほどのはあるうか、と言う天井に頭が突き刺さった！！！！

首から上が天井に突き刺さったまま、力なくただれるマシニティ。

「や、やったの？」

カミュが目の前で起こったことが信じられない、といった顔で言葉漏らす。

この試験はあいつの動きを止めることが目的、すなわち、

「俺の、俺たちの勝ちだ」

（４）（後書き）

戦闘シーン書くの楽しすぎて勢いだけになってしまった。展開速すぎたかも。

これの原作者の友人からトリクは力がすごい、と聞いていたのでものすごく強くしました。力だけを。

(5) (前書き)

前回のあらすじ。

フィーブルからの試験は、見たことも無いマシニティとの戦闘。

最初こそ、素早い攻撃に苦しめられるも、トリクとカミユの連携で
どうにかそのマシニティを打ち倒したのだった…。

(5)

「勝ち…？なにを言ってるんだ、お前」

俺の勝利宣言に興味なさそうな顔で、異を唱えてくるフィーブル。

「認めない気かよ。どう見たって俺たちの…」

言葉が途中で途切れる。

当たり前だ。天井に突き刺さってたはずのマシニティが落ちてきて、あまつさえこちらに敵意を向けているのだから。

マシニティは首を変な方向にひしゃげているのだが、どうやらまだまだ動けそうなのである。

「そんなのありかよ…」

小さくつぶやく。

マシニティはコアがある限りいくらでも再生する、しかし無敵、と言うわけではない。ダメージを与えれば、しばらく動くことなど出来ないはずなのだ。

こいつ、本物のマシニティじゃないのか？

「へっ、どうだっていい！何回だつてとめてやるさ！」

意気込んで、もう一度殴りにかかろうとする俺に、

「ストップだ！」

と、抑止の声がかかった。

声の勢いに押され、俺は急停止した。その声に反応してかマシンティのほうもその動きを完全に止めている。

声がしたのはこのマシンティが出てきた扉の前、そこに筋肉質の男が壁に寄りかかって立っていた。

「どういふつもりだ、フィーブル！ 貴重な試作機を、こんなにしまいやがって！」

その男は、怒鳴り、肩を怒らせながらフィーブルのほうに歩いていく。

「見てなかったのか、ゴルドーのおっさん。壊したのは俺じゃねえ、そっちのガキどもだ」

ナチュラルに罪をかぶせてきやがった！

しかし、そのおっさんは嘆息し、

「全部見てたんだよ。明らかに、お前の主導のもとやってただろうが……」

と、あきれたように言った。

「ま、いいだろ、おっさん。これぐらいなら直せるさ」

つまらなそうに言って、出口を開き、その場を立ち去ろうとする。

「ま、待ってください！ 私たちの試験はどうなった……んですか？」

探るようにたずねるカミユ。そうだ、試験が途中で止められてしまったのだ。この場合どうなるんだ？

「もちろん不合格だ、まだ決着はついてなかったんだからな」

当然のように言ってくる。最初から弟子など、取るつもりではなかったのかもしれない。

しかし、ここで予想外のところから異論が出た。

「なに言つてやがんだ？二人とも合格に決まつてんだろ。うが。そもそも新人レベルが、二人がかりとは言え、この試作機を相手にしてここまで戦えてることが奇跡みたいなもんだ、お前だつて分かつてんだろ？まずはお嬢ちゃん、こいつをかく乱できるほどの素早さを持つてゐる新人なんてそうそういねえ。それに見ろよ、このひしゃげちまつた首を。こんだけの力を持ったキャプチャー、この人手不足の時期に手放せるわけない。……まあ、二人とも短所が相当ひどいがな」

ゴールドと呼ばれた、マツチヨのおっさんからだった。

やけにほめられている。短所は見抜かれていたようだったが。

「じゃあ、合格でいい。よかったな、お前ら。このおっさんから認められれば、俺なんかよりずっといいキャプチャーに教えてもらえ

るぜ」

「他の人じゃなくて、フィーブルさんの弟子になりたいんです！」

さして興味のなさそうなフィーブルの言葉に、カミュがすぐさま反論した。

正直なところ、俺も、この男の弟子になりたかった。助けてもらったときに感じたのだが、相当な手練だと思う。

「無理だ、俺にそんな余裕はねえ」

やはり最初から弟子を取るつもりはなかったようだ。再び立ち去るそぶりを見せる。

しかし、そんな彼の肩にポン、とゴルドーの太い手が置かれた。

「ギルド長としての命令だ。お前、今日からこの二人の教育係な」

「…は？」

満面の笑みから放たれたゴルドーの言葉に、フィーブルが嫌気の混じった声で返す。

俺としてはこのマッチョのおっさんが、ギルド長であつたことに驚きだ。絶対現役のキャプチャーだと思つてた。

「どんなに嫌だろうが、これは命令だ！試作機をこんなにした罰だと思つて、あきらめるんだな」

ニヤニヤ笑いながらそう命じた。罰が与えたくて仕方なかったのかもしれない。

その言葉にうれしがるカミュと、面倒ごとを抱えてしまった、と言はんばかりに失意のフィーブル。

こうして、この日から、俺とカミュは見習いキャプチャーとなった。…ようだった。

(5) (後書き)

今までのより少し長めです。

回収してない複線があるけれど、後々回収(するつもり)します。
今回から、前書きにあらすじ書いてみました。

何かおかしい点とかあったら、指摘してもらえとうれしいです。

(6) (前書き)

デイ・ブレイクのギルド長、ゴルドーの一存でキャプチャーとなることが決まったトリク。

しかし、彼の前にはまだ試練が待ち構えていた…。

(6)

目が覚める。

昨日までめざめに見ていた、外の景色とは違うコンクリートの天井。

ここは、ギルド・デイブレイクの寄宿舎である。

そう、今日から正式に、俺はキャプチャーになる。

入団試験（本来はこの試験を受けなければならないらしい）を、受けることなくキャプチャーとなった俺とカミュだが、ギルド長であるゴールドの推薦、と言うこともあって反対の声もなくすんなりキャプチャーとして認められた。

今日はその認定式、のようなものがあるらしい。

起き上がり、着替え、軽い朝食を済ませたところで部屋のドアが音を立てた。

「おい、トリク。時間だ、早く支度しろ」

俺たちの教育係、フィーブルだ。

「わかった。その式っていうのは、何か特別持っていくものがあるか？」

一応、師匠と弟子みたいな上下関係はあるものの俺は敬語が苦手だし、フィーブルはそういったことに無頓着なのか、俺の言葉にまったく敬意が入っていないことに対して何も言わなかった。だから今のところフィーブルに対してしゃべり方を変える気はない。

「特に何もいらねえ、その体一つあれば十分だ」

重要な式典のようだったから、服装とか整えていくのか、とも思っただが、そういうのはいららないらしい。

ついて来い、フィーブルがそう言って歩き出し、俺はあわててその後を追った。

そうしてつれて来られたのは、白い壁に囲まれたそこそこ大きい部屋だった。白い壁以外には、天井にカメラのような物体が着いているだけだ。飾りつけも何もあつたものではない。

部屋の中央にたたずんでいたカミュが、こちらに気づき顔を明るくした。

「おはようございます、フィーブル先輩！」

朝から元気なやつだと思う。俺のほうに挨拶がないのは、なんとなく予想がついていたので特に気にはならない。

カミュは昨日、ゴルドーの鶴の一声によってフィーブルに師事できることになり、それはもう痛々しいくらいに喜んでいたのだが、

ひとしきり喜びきつた後、急に俺のほうを向いて「で、何であんたまで一緒なのよ！」と、突然怒り始めた。

俺がその言葉に反論するとますます怒り狂って、ついには俺のことを無視し始めて今に至る。

この女はよく分からん、と俺は思った。熱望していたフィーブルの弟子になれたのだ、俺がいようと、いまいと、関係ないじゃないか。

見ればフィーブルが、少し、ほんの少し戸惑っていた。顔は相変わらずの無表情だったが。

返事を返すのが億劫になったのか、挨拶の返事も返さないでおもむろに部屋の中央に歩いて「今から叙勲式を開始する」と言い放った。
オーナー・イクザム

「まさか、フィーブル先輩が相手なんですかっ！」

驚いた口ぶりのカミュ。その一方で、俺は叙勲式なるものが何なのか、まったく分からない。

カミュの問いに、そうだ、と答えたフィーブルに俺からも質問する。

「なあ、オーナー・イクザム叙勲式ってなんだ？」

「ん？何だお前、知らないのか」

相変わらずの無表情で、平坦に聞き返してくる。

知らない、と言おうとしたところで突然、ビーツ、という音が鳴った。音とともに部屋中が赤い光で照らされる。

すると突然、カミュが低姿勢になった。明らかに臨戦態勢だ。ピリピリした、本気の目になっている。

それを見たフィーブルが不敵に晒った！。今まで無表情だったフィーブルが今は愉しそうに晒っている。それだけで虫ぐらい殺せそうな、残酷な目をしている。寒くもないのに身震いしてしまう。

一体、なにが始まるというのだろうか。

「始めるぞ。…説明は後だ。二人がかりでいい。…かかってこい」

(6) (後書き)

今回は、トリクが正式にキャプチャーとなるための、いわば第二の試験の序章です。

本当は前回までので試験は終わらせるつもりだったのですが、早く戦闘シーン書きたかったので、ついやってしまった。

一応、この試験にも意味を持たせてあります。無計画で書いたわけじゃないよ！

(7)

かかってこい、フィーブルがそう言った直後、俺の隣を疾風が駆け抜けた。目で追えないような速さ、カミュだ。

その速さのまま、フィーブルに殴りかかろうとする、フィーブルが前の防御の為に身構える。しかし、

「フェイントですっ！」

その行動を読んでいたのか、カミュは拳を引つ込めて尋常でない速度のまま前を防御しているフィーブルの後ろに回り込んだ。

当然フィーブルの背後はがらあき、カミュの拳が直撃、しなかった。

「スピードは上等だ、バトルセンスもそこそこある。…だが、それだけだ。」

フィーブルは体を向けることをせず、後ろに手を回すだけで、カミュの拳撃を防いでいた。かなり不安定な防御の仕方だが、カミュの拳は完全に受け止められていた。

「さすがです、フィーブル先輩」

そんなセリフとともに、カミュが後ろに下がった。

「どうした？お前は来ないのか？」

こちらに問いかけてくる。これまでのことを鑑みるに、オーナー・イクザム叙勲式は教育係との戦闘、のようだ。

そうだとするならば無論、全力でやるべき、なのだが…。

生身の人間相手に全力を出していいのだろうか？そんな思いが脳裏から離れない。

俺は力の加減が出来ない半端者。そんな理由で俺は地元のギルドではキャプチャーと認められず、このギルドに来たのだった。

そう、フィーブルに助けてもらったあの夜、俺は本気を出さなかったのではない、出せなかったのだ。

本気を出して殴っていたならあのマシニティのコアごと破壊してしまっていただろう。それはキャプチャーが、キャプチャーになるうとする者が絶対にやってはいけない禁忌だ。タブー

「こないなら、こちらから行くぞ！」

フィーブルがこちらに向かってくる。カミユほどの速さはないものの、洗練された走りは実際のそれ以上に速く感じられる。

向かってくるフィーブルに対して反射的に手が伸びる。反射的であつたがために、本気の殴りになってしまふ！

自分で言うのもなんだが、本気の俺の拳は生身の人間が耐えられる代物じゃあ…。

時すでに遅し。どう動いたって俺の拳がフィーブルにあたる！

浮かぶのは砕けたフィーブルの瘦躯。

しかし、何も砕けはしなかった。俺の本気の拳をフィーブルがし
っかりの両腕で受けている。

んな馬鹿な、どんな体してやがるんだ!?

鉄なんかよりよっぽど硬い壁がそびえ立っているようだった。

「これが出し惜しみしてた力か?」

そんなセリフとともに姿が掻き消える。

「正直、拍子抜けだ」

背後で声がする。振り向くよりも先に、俺は意識を失った。

(7) (後書き)

戦闘シーンは気分が乗るので筆が進むけど、実際描写しづらいと思った、今回。

戦闘シーンが分かりやすい小説ってすごいと思う。

(8) (前書き)

オナーイグザム
叙勲式、それは自分の教育係と戦闘する、というものだった。
トリクは、フィールブルにとっさに出してしまった渾身の拳を受け
止められ、そのまま気絶させられてしまったのだった…。

(8)

目が覚める。

ここはどこだ？

いつの間にか寝かされていたベッドから起き上がって、辺りを見回してみる。

純白のベッドに、さまざまな医薬品のようなもの、消毒液のにおい。見たところ医務室か何かのようだ。

目覚める前のことを思い出してみる。だんだんと記憶がよみがえってきた。

「…そっか、フィーブルにやられたんだっとな」

はつきりとし始める意識、そうして自分が圧倒的な大差で負けたことを思い出した。

悔しい、という感情もないわけではない。しかし、気分は晴れやかだった。

俺はおごっていた、負けた今ならそう思える。

確かに力の加減がほとんど利かないことに対してのコンプレックスは持っていたが、逆に誰にも負けたことがなかった力を過信していたのかもしれない。だから、自分の拳を受け止めたフィーブルに驚かされ、それが隙になった。

「しっかし、強かった」

速さ、バトルセンス、そのほかのどの能力に関しても自分では遠く及ばないあの実力。

だけとおかげで気づいた。世界はまだまだ広いし、俺がまだ、ひよっこだということも。ただ、一つだけ文句があるとすれば、

「いくらなんでも、大人気なさ過ぎるだろ…」

これに尽きる。自分はまだ新人。もうちょっと手加減があってもよかったのではないだろうか。

まあ、手加減されたらされたで、むかついていただろうが。

とりあえず、この部屋から出ようと、出入り口に向かうと、ちょうどそこから人が入ってきた。

「あら？もう大丈夫なの？」

現れたのは、白衣の女性。まだ、多少の若さを残してはいるがはつきり言って、おばさ…

「いてえ！」

「今、失礼なこと考えてたでしょう」

両頬をつねられる。

思考を読み取られた！？エスパーか何かかよ！

「っ、つう…んで、あんた誰だ？」

「年上に対する口の利き方がなっていないようね、坊や？」

俺が訪ねたその瞬間、急に笑顔になる。逆に怖い。

「とりあえず、その件に関しては、置いておきましょうか。私はこの技術部で働いているシェーン。昨日あなたと、もう一人の女の子が壊してしまったあの子の生みの親よ」

そうだ！昨日のあのマシニティ。倒した後のどたばたで、すっかり忘れてしまっていた。しかしあれば、俺がキャプチャーにならなくてはいけなかった目的と関係あるのかもしれないのだ。聞いておかくてはならない！

「なああんた、あのマシニティをどこで！？試作機って何なんだ！？」

「ちょ、ちよっと、急にたくさん質問しないでよ」

急に真剣になった俺に対して戸惑っているシェーン。しかし、これは俺にとって重要な問題だった。

「わかったわ、順を追って説明していきましょう。まずあのマシニティは南の森の調査に行ったフィーブルが捕まえてきたマシニティよ」

その言葉に引っかかりを覚える。

「待ってくれ、調査任務は戦闘をしない任務じゃないのか？」

ギルドの任務には三つの種類がある。戦闘任務、^{オグ}護衛任務、調査任務の三つだ。

戦闘任務はマシニティに奪われたエリアを取り戻すために、決められたエリアのマシニティを殲滅、あるいは追い出す任務。護衛任務は人が住んでいる村などにマシニティが攻めてきた場合に出される任務で護衛対象となるエリアの安全を確保する任務。これら二つは主に戦闘をする任務だ。

だが、調査任務だけはちょっと違っている。

まだマシニティから取り戻せていないエリアの調査やマシニティに関して、何か特異なことが起こった場合の原因究明を行う任務で通常、戦闘は一切行われない。

「私だつて驚いたわよ。あのフィーブルが調査任務でマシニティに見つかる、なんてへまをするなんて」

「あの、フィーブル？フィーブルは、調査が得意なのか？」

キャプチャーにも、向き不向きがある。三つの任務も、それが得意なキャプチャーに優先的にまわされるようになっていた。

あれだけの強さを持っているのだ。フィーブルは戦闘任務がまわされるキャプチャーだと思っていた。

「違うの。他のキャプチャーと違って、あの子はパーフェクトなの

よ。偵察任務だけじゃなくて戦闘任務も、護衛任務もすべて完璧にやっけてしまう。今まで失敗したことなんてない子だった。…
彼、このギルド始まって以来の才媛なのよ」

三種類の任務すべてが回ってくるキャプチャーなどそうそういない。逆に言えば、それだけフィーブルが優秀だった、ということだ。じゃあ、そのフィーブルが何で…。

「あの子の報告にはこうあったわ…自分は『機械の王』に襲われた、と」

その言葉を聞いて、俺の全身に電流が流れた。

そう、『機械の王』。俺が捜し求めていたキーワードがようやく見つかった…。

（８）（後書き）

戦闘シーン意外だと急に筆が遅くなる不思議。

次回も戦闘シーンはない予定です。テストもあるので、上げるのは遅くなると思います。

あと次回の話を書く前に、一度全文章を読み直してちょっと書き替えるかもしれません。多分、ひどい文章になってしまっていると思うので。

ただ、改稿しても話の本筋はいじらないので、わざわざ読み直してもらわなくても大丈夫だと思います。

(9) (前書き)

意識を取り戻したトリクに技術者シェンが例の試作機について語る。その話の中にトリクの追い求める「機械の王」が出てきて…。

「他には、他には無いのか？」

自分でも驚くほどに冷静な声。目的に近づいたことで心が逆に静まり返っていくのを感じる。

「そのフィーブルが言うところの‘機械の王’は言葉をしゃべったそうよ。そいつがああのマシニティを大量に呼び出したらしいわ。そうして‘機械の王’は姿を消した。その中の一体だけ捕獲してフィーブルは逃げてきたってわけ。…これが報告のすべてよ。相当な激戦だったんでしょね。彼、ぼろぼろだったわ」

長い話を終えてシェーンが息をつく。

その話を聞く過程で確信した。‘機械の王’はあいつだ、と。

そんな俺の心が顔に出てしまったからか、シェーンがこちらに尋ねてくる。

「…その顔は何か知ってる顔ね。教えてもらえるかしら？」

きつとギルド側としても情報が欲しいのだろう。なにせ言葉をしゃべるマシニティなど、今までいなかったのだから。そのマシニティを捕獲できたなら、言葉によって彼らの情報を得ることが出来るかもしれないのだ。

でも…

「悪いが、言えない」

こちらにはこちらの事情がある。このことに関してはどうしても言うことが出来なかった。

「もしそれが命令違反だというのなら、ここでキャプチャーになるのは諦めて出て行く。それだけの覚悟はある」

キャプチャーになるのも目標だ。だけどそれはもう一つの目標のための通過点に過ぎない。

「…別にそこまでは言っていないわよ。聞かないで置いてあげるけど、あなたが‘機械の王’に関して知ってる、ということを私以外の誰

にも悟られないようにしなさい。ここは今、‘機械の王’の調査やら、噂やらで持ちきりなんだから」

「すまねえ」

シェーンがいいおばさんでよかった。

「やっぱり、話してもらおうかしらねえ」

「また読まれた!？」

シェーンはいい人だが、エスパー。そう心に刻み付けた。

「話を戻すわね。フィーブルが持ち帰った、あのマシニティのコア。見たことの無い種類のマシニティだったから興味がわいちゃってね、スクラッパー解体者に回す前に私が貰ってきて檻の中で再生させてみたのよ」

スクラッパー 解体者とは、キャプチャーが持ち帰ったマシニティのコア、ただおいておくだけでは再生してしまうその機能を停止させる、ある意味ではキャプチャー以上に重要な職業である。

「普通、研究のために再生させたマシニティはそのすべてが檻の中で暴れまわる、場合によっては檻そのものを壊すほどにね。だけどあのマシニティは違った。静かに立っているだけなの、まるで何かの命令を待っているかのようにね」

自律的ではなく、他からの命令によって動くマシニティなど、今までに確認されていなかったと記憶している。やはりあのマシニティは特別らしい。

「そこでいろいろなことを試してみてね、とりあえず人を襲わせる命令と、行動をとめる命令だけ見つけられたの。だからあれはまだ不完全。試作機なのよ。…これくらいね。話せそうなことは。何か質問はある？」

「あのマシニティについては大体分かった。…で、俺がさっきやらされた叙勲式オーナー・イグザムってのは何なんだ？」

自分の教育係との戦闘。何かしら意味があるのだろう。少なくとも、選定自体はその前の試験で終わっているのだからそれ以外の目

的があるのは明白だった。

「それについては俺が説明しよう」

突然の横槍。聞こえたのは野太い声、ゴルドーのものだ。
「来い、坊主。お前にキャプチャーの『証』を見せてやる」

(9) (後書き)

ずっと説明のターン。次回もおそらく説明のターン。

この話はプロットを作らず書き始めてしまったので、こういう説明の回で設定を作ってる感じです。やっぱプロット作っておくべきだったなあ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0991/>

マシニティ・コア

2010年10月10日05時51分発行